人々の暮らしや信仰と深く結びついてきた仏神像の価値や、修復に向けた課題について、仏像彫刻史が専門の元崇城大芸術学部講師、中西真美子さん（熊本市）に聞いた。（魚住有佳）

平時から調査・記録を

元崇城大芸術学部講師
中西真美子さん

人吉・球磨は、平安後期から室町時代までの仏神像が集中しており、とりわけ平安期の仏像の多さは京都・奈良を除き全国的にも希有な地域。一つのエリアで時代ごとの特徴をたどることができ、彫りの確かさや緻密さは、中央の有名仏師にもひけをとらないものもある。

この地域で多くの仏神像が残った背景の一つには、鎌倉初期に入った相良氏が700年にわたって統治し続けたことが大きい。相良氏は、他の有力氏族が作らせた寺社や仏神像を含めて手厚く保護することで、一族や領内を安泰させようとしたと考えられる。

民家の庭や集落の道沿いにもほこらが多く残っており、地元の人々が祭事を通して仏神像を代々守り伝えようとしてきた意識の高さがうかがえる。これらを含めた独自の歴史・文化が評価され、2015年には人吉球磨10市町村の有形・無形の文化財群は「日本遺産」の第1号に選ばれた。

昨年の豪雨で被災した仏神像の多くは未指定文化財だが、中には市町村指定を受けるに値するものもある。1年以上たった今も所在不明の仏神像がある点からは、市町村が確認していない被害がほかにもあり、平時から未指定の仏神像を調査・記録することの重要さが分かる。

県内では歴史的建造物の修復・保存の動きが活発だが、仏神像分野でも専門家らが垣根のないネットワークをつくる必要がある。被災地域が生活再建に追われる中、県にはその中核を担ってもらいたい。仏神像はその土地の歴史や文化を証明する価値ある存在だからだ。

被災した仏神像を修復するにあたって、調査や相談が必要な時は力になりたい。独自の補助制度を設ける自治体の動きがさらに広がることも期待したい。

中西真美子さん